

Bookstart Newsletter



2024
冬
No.83

ブックスタート・ニュースレター



静岡県清水町

特集

自分が変わる、地域が変わる

ブックスタートを通じた「ひとづくり」「まちづくり」

図書館・保健センターの複合施設で行われる静岡県清水町の6か月児健康相談。相談を終えた親子に、ボランティアが「お話をしてもいいですか?」と声をかけます。アドバイスブックレット※を使いながらブックスタートの趣旨を伝え、読みかさが始まります。「じゃあ、絵本を読みますね。ぜひお子さんの表情を見てください」

「すいか。さあどうぞ」ボランティアの声に赤ちゃんが不思議そうな表情を浮かべ、そんな我が子の様子に保護者の頬が緩みます。

「よく絵本を見ていましたね。ご家庭でも読んでみてくださいね」

最後に図書館の紹介をして利用案内などの資料と一緒に絵本を手渡します。20年間、絵本のプレゼント事業を行ってきた清水町が、趣旨を伝え読みかかせの体験も届けるブックスタート事業を開始したのは2022年。その原動力となったのは、他自治体での実施方法を知り、「ぜひ、うちの町でも取り入れたい」と声をあげ行動したボランティア、それを受け止め実現に向けた努力した自治体職員存在でした。

ブックスタートが、「ひとづくり」「まちづくり」の事業としても行われている清水町の取り組みをご紹介します。

※アドバイスブックレット「赤ちゃんといっしょにはじめまして 絵本」…当NPOがブックスタート実施自治体向けに提供している「赤ちゃん」と絵本を開く時間の楽しさ」を伝える冊子。

きっかけは、近隣自治体の 充実した取り組み

清水町が健診での絵本プレゼントを開始したのは2002年。その頃は、健診の合間に絵本を選んでもらって渡すだけの事業でした。

「ただプレゼントするだけでいいのかしら?」。事業に携わっていたボランティアの鈴木真理さんは、絵本が親子のコミュニケーションになることを伝えづらい状況に、疑問を抱いていました。

そんな時、隣接する三島市がブックスタート・ボランティアを募集。鈴木さんは、三島市でも活動に参加することにしました。

「ボランティア養成講座を受講した時、ブックスタートの趣旨を伝えることが大前提だ」という市の担当者の言葉にハッとしました」と鈴木さん。「ブックスタートで絵本を読むと、赤ちゃんは絵をじっと見て笑顔になってくれたり、読み手を見つめたり、時にはすごく泣いているのに泣き止んだりすることもありますが、お母さんたちにそんな楽し

い体験を家に持って帰ってもらいたい。絵本をツールに親子でふれあえることを伝えるためには、ただプレゼントするだけじゃダメだと思ったんです」。

鈴木さんはその思いを手紙にして町長に送ったり、読みきかせサークルの仲間へ伝えたりしていきました。



家族みんなで絵本を見つめます

視察レポートを作成

その鈴木さんの思いに応えたのは、サークルの仲間と、清水町の教育委員に任命されたばかりの渡邊若菜さんです。町に提案するために三島市の視察を行った渡邊さんは、絵本を見つめる我が子に驚くお母さんたちの表情に感動します。

「親にとって、我が子の新たな一面を知ることができるブックスタートの体験はとても大事だと思いまし

た。この事業を実施することは清水町にとって絶対いいことだと確信し、撮影した写真とともに視察レポートとしてまとめました。レポートに残すことで客観的に説明できますし、読んでほしい人に渡すことができます」。渡邊さんは、教育委員会や町長・副町長が出席する町の総合教育会議にレポートを提出し、実施を呼びかけました。

当時、役場の一部には「0歳の赤ちゃんに読みきかせをしようとするの?」という懐疑的な意見もありましたが、「ブックスタートは、子どもが中学生、高校生、あるいは保護者になった時に、実施してくれて良かったなと思ってもらえる事業。ぜひ長い目で見てほしい。そして、これは保護者のための事業でもある」と、諦めずに訴え続けました。



ボランティアの皆さんと図書館員の秋田さん(右端)
地元出身の絵本作家・宮西達也さんの
絵の前でパチリ!

住民の無私の願いを実現させたい

鈴木さん、渡邊さんの努力が実り、事業に前向きな町長の発言、図書館・保健センター複合施設の開館に向けた動きを追い風に、具体的な検討が始まりました。

担当となったのは、着任間もない図書館員の秋田桂輔さん。三島市を視察したものの、実施機会である母子保健事業の状況が違うため、清水町なりの実施方法を考えるべく必要性を感じました。

アドバイスブックレットの予算確保、スケジュール立案、運営体制づくり、ボランティアの募集・育成、母子保健担当課との調整。やらなければいけないことは山積していましたが、一つ一つ準備を進めていきました。

複合施設の開館と重なり多忙を極めるなか、なぜ新事業にも力を注いだのでしょうか?

「住民が、自分たちのためだけでなく地域の親子のために声をあげ行動してくれている。町を良くしていきたいという姿に、町職員として、できるだけいい形で実現させたいという気持ちにさせられました」と秋田さん。そして2022年1月、6か月

図書館
では

こんな取り組みも

連携で充実！

ブックスタート&フォローアップ

■ 保健センター×図書館



▲清水町図書館・保健センター複合施設「まほろば館」
複合施設であることを活かし、様々な取り組みをしています

- 健康相談欠席者への対応
- マタニティ教室での読みきかせ
- 2歳児歯科健診での読みきかせ
- おはなし会での保健師・栄養士の講話
- 保健に関する書籍紹介／展示
- 月ごとのテーマにそったコラボ事業



プログラムは、「ボランティアによる読みきかせ」と「保健師・栄養士からのおはなし」

保健の話に関心のない人も、おはなしのついでに、聞いてくれます。夏休みには、一緒に来た小学生の兄弟にも聞いてもらえました。(保健師)

■ ボランティア×図書館

- 赤ちゃんおはなし会

■ 書店×図書館

町内の書店と協定を結び、官民連携で本を活用したまちづくりを進めています。

- 町内書店売上ランキングの紹介
- ブックフェアの開催



各書店の売上ランキング(一般・児童書)を図書館やウェブサイトで紹介。図書館の蔵書にあるかどうかも分かるよう工夫しています。

ブックスタートを通して、
スタッフ自身が変わる

児健康相談でブックスタートを開始
することになりました。

開始して2年。保健師とも協力し
実施方法を日々改善していきまし
た。「保健師がブックスタートを気
にかけて、こまめに声かけをしてく
れるので、こちらまでできる限りの協
力をしようという気持ちになりま
す」という秋田さんの言葉どおり、
連携は当たり前という体制のなか、

とてもいい流れで実施できるよう
になりました。

絵本を手渡していただけた頃には比
べ、趣旨が伝わっている実感が得ら
れるようになったばかりでなく、「親
子のための事業ではあるけれど、関
わるスタッフにとっても、赤ちゃん
とふれあうことで嬉しさや充足感を
得られる事業になっています。ブッ
クスタートでの親子との出会いを積
み上げていくことは、ひとづくり、
まちづくりにもつながっていくと思
います」と秋田さんは言います。

「以前の私は、町がしてくるこ
とをそのまま受け止めるだけの存在
でした。でも、責任は伴いますが、
自分たちが希望すれば町が動いてく
れることを知りました。自分自身が
すぐく変わったように思います」と
渡邊さん。
無私の願いを声に出して訴え、手
を携え行動していくことで、自分が
変わり、町さえも変わっていく。ひ
とづくり、まちづくりとしての事業
の広がりを清水町のブックスタート
に感じました。



何？何？絵本に興味津々

ブックスタート全国研修会 2023

当 NPO ウェブサイト
「読みもの」でも
ご紹介しています!

2023年10月20日、『ブックスタート全国研修会』をオンラインで開催しました。テーマは「『赤ちゃんにとっての最善』のために私たちができること」。ブックスタートの根底にある「一人ひとりの赤ちゃんの存在を尊重する」という精神に改めて立ち返る機会となりました。



講演



『子どもの声を聴く』

講師 小澤いぶきさん

児童精神科医／認定 NPO 法人 PIECES 代表理事

「絵本を楽しむ赤ちゃんの様子に大人が応答するのも、赤ちゃんの権利に根ざした関わりの一つです」

事例紹介



● 神奈川県藤沢市 ●

市民ボランティアとの協働について発表。「これからも赤ちゃんに関わる人の輪を広げていきたい」と話しました。



● 愛知県尾張旭市 ●

「読みきかせの楽しい体験が、親子の関係づくりにもつながっている」と、母子保健の立場から発表しました。

新刊 のお知らせ

絵本は親子のゆりかご 伊藤明美 (司書)

2022年度
ブックスタート全国研修会での
講演が冊子になりました!

「これ読んで!」と、お迎えに来たお母さんを保育園の絵本コーナーに連れていく女の子。絵本の表紙の絵を見て、あれは自分だと保育士に伝える男の子。そうした子どもたちの姿の理由を、図書館、保育園などでの豊富な読みきかせの経験をもとに語ります。子どもは、読み手を通して絵本の世界を体験し、本と一緒に、読んでくれた人や時を記憶して成長する……。ブックスタート、子どもの読書、子育て支援、保育など、「絵本」「子ども」に関わる人たちへ、エールを送る一冊です。

ご注文はこちらから



770円 (税込)

- 2024年1月発行 ● 44ページ
- A5サイズ ● ソフトカバー

ことのは

NPO ブックスタートのスタッフが出合った言葉

ブックスタートのボランティアに行った日は「お母さん、いつもより優しいよね」って娘に言われるんですよ。
——愛知県日進市 ボランティアさんのことば
大学生の娘さんに「次はいつ?」と聞かれるのだそうです。「ボランティアといいながら、私のほうが赤ちゃんに幸せをもらっています」と生き生き語るお母さんの姿は、娘さんの目にも輝いて映っているのではないのでしょうか。